

筑紫の地名と校名の歴史的由来

(1)地名と校名としての「筑紫」の由来

本学園の校名となっている「筑紫」とは、古代から九州を指す地名であったが、厳密には、北部九州を指していると考えられる。

更に、現在の福岡県でいえば、南部を筑後、北部を筑前、中部を筑豊と言っており、記紀（古事記・日本書紀）における神武天皇（およそ 2700 年前に日本が建国された時の初代の天皇陛下）の御東征（日本の中心である奈良に都を建てるために九州から諸豪族を統一しながら移動したこと）のとき、北部九州を「筑紫・豊国」と呼び、当時、豊国は、北部を豊前（小倉北区・小倉南区・門司区と筑豊地区の東部の田川市と大分県北部の中津市・宇佐市までを含む）、更に、南部を豊後と呼んでいることから、「筑紫（つくし）」とは、地域としては、九州全体若しくは、北部九州（現在の八幡東区と小倉を境とする）を指す地名であったと考えられる。

現在の東筑紫学園は、小倉北区と小倉南区に立っているが、学園創設のときは、現在の八幡東区（筑紫）の荒生田が発祥の地であり、古代から「筑紫」と呼ばれる地域であった。

しかし、本学園の校名が、単に古代からの地名を使っただけのものではないということを理解する必要がある。

本学園の建学の精神（本学園設立の教育理念）は「筑紫の心」であり、その「筑紫の心」は、古代におけるわが民族が、神話の中で展開した、日本民族の理想や日本精神が現れているものだからである。

そして、「筑紫」という名称が、我が国の神話および国家成立における歴史上、重要な意味を持つ地名であるということである。

それは、我が国の神話（古事記・日本書紀）の物語に、出てくる名称であり、その神話の中でも、極めて、重要な場面で出てくる名称なのである。

しかも現在の「筑紫（ちくし）」は、神話では、「筑紫（つくし）」や「筑紫の日向」の呼び名で出てくるのである。

古代言語は、その発音が大切で、漢字は、その発音に対する当て字が多いので、その発音の持つ意味そのものを理解しなければ、神話に出てくる言葉は、解釈が難しいものとなる。日本語の五十音の発音を中心に解釈することを「言霊学的解釈」というが、この「筑紫（つくし）」という言葉も言霊学で解釈することにする。

(2)「筑紫（つくし）」の地名の神話的・歴史的重要性

①伊邪那岐尊が禊払いを行った場所が「筑紫の日向」である。

神話としての内容は、「男性」及び「陽」の原理を象徴する伊邪ナギノミコトが、妻であり「女性」及び「陰」の原理を象徴する伊邪那美尊（イザナミノミコト）が死んで、黄泉の国（妻が黄泉大神・冥途の神の住む死者の国）に行ってしまったの

で、妻の後を追って黄泉の国に行ったとき、亡き妻であるイザナミノミコトがくれぐれも私の姿を見ないようにと言ったにもかかわらず、闇の中で、イザナギノミコトは、自分の髪の毛に火をともし、その姿を見たのであるが、その亡き妻の体は腐って蛆がたかっていたため、イザナギノミコトは驚いてその黄泉の国から逃げ出してしまったのである。

そのイザナギノミコトを、黄泉の国の軍隊が追いかけてきたが、それを振り切った後、自分の体が、罪穢れで汚れてしまったので、川の中瀬で「禊払い（禊は「身削ぐ」で、その罪穢れを洗い清める）意」を行った場所が「筑紫の日向」という場所であった。

この禊払いを行ったところが「筑紫の日向」という場所であるが、禊払いという罪穢れを祓い清めるというこの行事そのものが、日本民族の特色を表すものでもある。

それは、一つには、日本人は、肉体も精神も「清らか」であることを好む民族であるということである。

日本人ほど、毎日のように入浴して、体を清める民族は、おそらく世界上で一番であろう。

また、精神的には、あいつは「悪い奴」だという表現より、「清い」の反対の言葉である、あいつは「汚い奴だ」とか「腹黒い奴」という言葉の方が、相手を批判する言葉として、よく使われている。

このような独特の清い・潔い精神を日本人は「清明心」とか「清く直く明き心」として尊重してきたのである。またそのような精神を持つ民族として、古来から「神州（神の国）清潔の民」と呼称してきたのである。

日本の武士は、自分の身の潔白（清さ）を証明するために、切腹し、自分のはらわた（腸）を取り出してみせるのである。

②「禊払い」と「お掃除」の心

本学園が、お掃除教育に力を入れているのも、この日本人の「清らかさ」を重んじる伝統的精神から来ており、建学の精神である「筑紫の心」の核をなすものでもある。

特に建学の精神の最初に「教育とは心の畑を耕すものである」という文言から始まるが、まさに、ともすれば、雑草のように、罪穢れが、繁殖して痩せ細りがちな心の畑を耕して、本来の清浄な心（清明心）を復活する（新生する芽を伸ばしていく）ことこそ、大和（日本）民族の「禊払い」の精神である。

大学・短大の学長であり、本学園の常務理事（代表理事）である室井廣一先生が、常々、「お掃除はお掃除をしないようになるために行うものである」と言われているが、それは、お掃除は、自分の心のお掃除をするために行うのであるということと言われているのであって、お掃除によって、自分の心が清らかな心になるためにするのであるということである。

心を磨く行としてのお掃除が、本学園のお掃除教育の要諦であり、「禊払い」の奥義である。

しかし、その「お掃除」が心のお掃除となるには、最も大切な方法がある。それは、お掃除をするときに「感謝の心」をもって行うことである。

自分の身の回りの道具から始まってトイレの掃除に至るまで「感謝の心」でお掃除をすることである。そして、更に、自分を生かしてくれている衣服、食事、車、電気、家、植物、太陽、空気、大地、あらゆる天地万物、そして、両親、兄弟、友人、すべての人類及び社会・国家に対して「感謝の心」を育むことである。

お掃除は、そのような感謝の心を育む日常的実践の行として、重要である。心の雑草（怒り・憎しみ・嫉妬・恐怖・不安など）の心をむしり取り、真澄の清らかな心として新生するための有力な方法である。

③「筑紫の日向」の言霊学的解釈

「筑紫（つくし）」は、その語源は「尽くす」から来ており、四方八方に広がる（尽くす）という意味である。そして、「日向（ひむか）」の「日」は、「陽」すなわち「太陽」を表しており、「向」は、そのまま「向かう」という意味になる。それゆえ「日向」とは、「太陽が向かう」という意味になり、「筑紫の日向（つくしのひむか）」で「太陽の光が尽十方（四方八方）に広がる大宇宙」を指す言葉となる。

④^{てんそんこうりん}天孫降臨の地「筑紫の日向」

「筑紫の日向」の名前は、イザナギの尊の「禊払い」の場所であるだけでなく、日本の歴史神話においては、もう一つ重要な場所として登場する。

それは、高天原（^{たかあまはら}天上の神の国）を治めていた「天照大御神」（^{あまてらすおおみかみ}）の孫である「瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）」が、高天原から地上（記紀では「^{うなばら}海原」となっている）に天下ってきた場所が「筑紫の日向」である。

記紀では「瓊瓊杵尊が筑紫の日向の高千穂の久士布流多気（くしふるたけ）に天降る」と記述されている。

この瓊瓊杵尊の子孫が、我が国における歴代「天皇」となられた方である。そして、その天孫降臨の際、瓊瓊杵尊が、一緒に持って降りられたのが、「三種の神器」（^{さんしゅ しんき}）と言われる皇位継承の三種の「宝器」（^{ほうき}）である。

この宝器は、「八咫瓊勾玉（やさかにのまがたま）」「天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）・草薙劍（くさなぎの剣）とも言われる」そして「八咫鏡（やたのかがみ）」の、いわゆる「玉」（^{たま}）と「劍」（^{つるぎ}）と「鏡」（^{かがみ}）の三種の神器である。

この「三種の神器」は、皇位継承の神器であるだけでなく、日本精神（神ながらの道）における理想的精神の象徴としても重要である。

「玉」は、丸く（角立たぬ）円満な精神を表し、大調和の心を表している。古代の表現を使えば「和魂」を表し、「劍」は、正邪の剣（正と邪を分ける剣）であり勇気の象徴である「荒魂」を表している。そして、「鏡」は、「幸魂」と「奇魂」を表

している。

特に鏡は、天孫降臨の際「天照大御神」が、地上に天下るニニギノミコトに対して、「この鏡を見るときは、我（天照御大神）を見るがごとくせよ」と告げられた「鏡」である。

つまり、「この鏡を見るときは、自分の心が天照大御神の心と一体となっているかを常に顧みよ」ということである。

天照大御神とは、宇宙を照らし天地万物を生かすところの太陽を象徴とする、愛と知恵（宇宙の秩序整然とした動きの背後にある法則を表す）の象徴である。

ここにも、本学園の教育理想である、四魂の調和（勇気・親和・愛・知性）の精神の原点となる神ながらの道の日本精神（大和の心）が、歴史的な神話の中に表現されているのである。

まさに、本学園のもう一つの「建学の精神」の冒頭に「宇宙の根源をなす神の意志を以って心とする平和理念に基づいた教育を根本方針とし」にある「宇宙の根源をなす神の意志」こそ天地万物を生かす「天照大御神」の御心そのものである。

(3)校名「東筑紫」に込められた「筑紫の心」

今まで論述してきたように、「筑紫」の地名は、元々北部九州一帯を指す地名であり、神話的歴史においても、神の御子が天下ったところの地名であった。

そして、この「筑紫」の地名は同時に、日本民族の神ながらの道（大和の心）を象徴的に表現したものでもあった。それ故、本学園の校名に込められた心は、まさに、神ながらの道そのものであり、それは同時に本学園の建学の精神「筑紫の心」に込められた心でもある。

それでは何故、創設者は「筑紫」の前に「東」を付けたのであろうか。文献が残っていないためその真意はわからないが、元々「筑紫」は同時に「日向」であり、太陽は、東から昇ることを考えると、「東筑紫」は「筑紫の日向」と同じ意味になる。

それ故、「東筑紫」とは、太陽の光が宇宙全体をあまねく照らし、天地万物を愛と知恵（法則）によって生かし、大調和の生かし合いの世界（大和の世界）が展開されている、宇宙の真相（本当の姿）そのものを現している言葉（校名）と言えるのである。

本学園の「東筑紫」の校名に込められた創設者の深い思いは、大和（日本）民族が、人類社会の平和と共存を理想として数千年にわたって培ってきた思いと同じである。

それ故、創設者宇城信五郎先生は、生前、世界平和実現のために、日本の理想でもある「世界連邦政府」実現に向けて尽力されたのである。